

讀

論

藏

庫

江苏工业学院图书馆
书章



鏡花全集 卷五 第五回配本（全二十九）

昭和十五年三月三十日 第一刷發行
昭和四十九年三月四日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

月下園	(明治三十三年六月)……………	一
ゆき松の露	(明治三十三年六月)……………	二五
うしろ髪	(明治三十三年七月)……………	三
長屋刃傷	(明治三十三年八月)……………	五
三枚續	(明治三十三年八月)……………	五七
式部小路	(明治三十九年一月)……………	一九九
女肩衣	(明治三十三年十月)……………	三七七
葛飾砂子	(明治三十三年十一月)……………	三八七

裸 蠟 燭	(明治三十三年十一月)……………	四三
政談十二社	(明治三十三年十一月)……………	四一
處方祕箋	(明治三十四年一月)……………	四一
斧 の 舞	(明治三十四年一月)……………	五〇七
雪 の 翼	(明治三十四年一月)……………	五二七
風流後妻打	(明治三十四年一月)……………	五三一
水 鷄 の 里	(明治三十四年三月)……………	五四九
註 文 帳	(明治三十四年四月)……………	五一
蠅を憎む記	(明治三十四年六月)……………	六一

月下園

此の邊は未だ盛に鶯の聲がする、根岸も上野寄りの唯有る横町、曲角は廣小路邊の去る料理茶屋の寮で、小路の右側は、其の板塀の新しいのが眞直に續いて居る、當面に一軒古びた冠木門の戸を閉切つたのが在つて、屋根には草が生えて居るだけでも、内の荒涼たる狀を想ふに足る。是は四季折々の花を殊に卯花を以つて聞えた月下園と、知る人ぞ知る女優市川滿壽美が獨棲の隱家である。今こそ大審院の檢事と云ふ身分に成つて、相談づくで切れて了つては居るが、舊は其名の達と云ふのを、假名に和くたつさんと浮名を流した時分、滿壽美が大得意の是見よがしに、男の能書を猶嬉しく徒書を爲てもらつた

野暮の者入る可からず

と有る制札を當時の形見に、庭の入口に立置いて、然も何人の入るをも拒まず縦覽させて、氣に合へば敷物も出し、茶も出して、主が射ら待すと云ふ、一風變つた所を人が喜んで、杖を曳く者も絶えぬのであつたが、滿壽美が礎と此の木戸を鎖して、飄然として行方を知らせず出て行つ

てから、今は早や三年越。

地體家業柄なり、特に派手好の負ける嫌で、稍氣骨の稜々たる者有るが爲に、悪くは爲てくれぬ人の曳く袖を幾度となく振拂つて、世の中を氣儘三昧に送るだけ、それだけ都合が儘にならぬ習、いつか云といふ程積つた借財の、其山を挾んで北海道筋を出稼に暫く影を潜めたのである。

留守には一箇の婆さんが居るばかりであるから、おのづと音づる、者は無くなる、それに、手は無し、掃除は届かず、雨は降る、風は吹く、草は延びる、垣は壞れる、釘付に爲たやうな門の扉は、合せ目に貼然と蜘蛛が巢を懸けて、滿庭の青葉は晝尙昏く沈々として、哀に物の儂き風が戦ぐのである。

右側の板塀の内は鉞を入れた庭木の梢が形好く立並んで居るが、片側は森の下蔭の草深く、晝でも爪頭の濡れさうな、細い小路の三分一は件の寮の持分である證には、現金に其だけは車前子の根も見えず、綺麗に手入が届いて、日向の土は澁々と光つて居る。月下園の門際の山吹の葉で埋つた垣の中から、矢を射る如く顯れた赤犬は、草の尖で腹を擦つて駈來ると、又一匹追かけて出た黒斑は、露地の中程で赤の背中を前向へ高く跳り越えた。上になり下になり、二三度吠合つて引組んだが、斑は忽ち隙を得て鐵道線路の方へ逃行くのを、赤は慕地に續いた。

恰も爾時隣々と勢の好い車の音がして、寮の前あたりに乗り付けた氣勢であつたが、間有ると

此の翠滴るばかりの小路に得ならぬ芳芬を散して婀娜な姿が顯れた。着付は薄紅かけの薄落し染にした縮緬の單衣、藍鼠地に白上りの水と、葉を墨仕上にした紫紺の姫百合の模様。帯は御納戸縹子に銀の泥描の雪景山水。齡は廿五六よと見えて、形の小造な、所謂柳腰の、後姿の好い、小意氣な細面の、口許の緊つた、背の凛とした、ふつさり有る髪を樂屋銀杏と云ふのに結んで、白粉も傅けずに。深張の傘と手鞆とを一つに提げて、汗ばんだ頸許に被る後毛を搔上げながら、無雜作に蹣跚と歩いて月下園の門まで着いたが、何思ひけむ急に立住つて四邊の光景を一邊熟と呬した。扉の蜘蛛の巢と、屋根の草と、庭の眞闇に成つたのには、些と驚いたらしく惘然として居たが、旋て耳門を放けて驪然と入つた。

折しも洗濯盥を据ゑて精々と水を汲んで居た留守居の婆さんは、顔を振向けると與に、覺えず出たと云ふやうな怪しからぬ大聲で、

「おや〜！ おや、まあ、お歸り遊ばせ、お師匠さん、まあ貴方。」

「媼さん、御機嫌好う。」

「まあお師匠さん、貴方もお變も御座いませんで。まあ〜大相お長かつたぢや御座いませんか、それに一向お便も御座いませんものでしたから、甚麼にお案じ申して居りましたらう。而して如何で御座いましたえ、那地のお景氣は。」

「まあ何方かと謂へば好い方でね、」

「そりや何より結構で御座いましたね。」

「まあ喜んでおくんなさい、些は儲けて来たんだよ。」

「好い鹽梅で御座いましたね。何爲ろ、貴方、お召替でもなさいますて、直にお風呂を沸しますで御座います。未だどうもお掃除も致しませんですから、取散かつちや居りますか。」

と襦を脱しながら急いで水口から上つた。満壽美は存分に荒果てたる園内の景色を眺めつつ、徐に駒下駄を鳴して、飛石傳ひに小座敷の前に出て、其處の障子を啓けるなり、どつかりと腰を掛けた、而して奈何か我家ならぬ餘所にでも来たやうな氣色で、杳脱に足を揃へて、片手を後に挂いたまゝ、恍然と庭を見入つて居るのであつた。其處へ出て来た婆さんは、

「ほんに、まあ今日お歸来にならうとは夢にも存じませんでした。お師匠さん、貴方何を那樣に見惚れてお在でなさるんで御座いますえ。お久しぶりで自宅がお珍しいので御座いますかい。」

満壽美は些と見返つたばかりで、然うでもあり、然うでもないと言つたやうな笑を含んだ、が極めて氣の無い、寂しい、何等の意味か別に有りさうな。

「まあ、お上り遊ばしませんかね、えゝ、お師匠さん。」

「此で些と休ませて下さい。」

「然やうならお苺盆でも持つて参りませう。」

「但しお茶代は出ませんよ。」

仇口を利く傍から直に歎息を呶いて項を垂るゝのである。

嗟呼、慙して歸つて來て見れば、やつぱり自分の家ほど好い處は無い、何と無く嬉しいものだ。

とは謂ふものの親は無し、兄弟は無し、逢ひたい人は此には居ず、三年越稼いで歸つて來た、少しは持つて歸つて來たと云ふのに、然うか、好く歸つて來たと喜んでくれる人は無し、えゝ、張合の無い事だ！

女孀には花が咲くと云ふが、嘘だね、大嘘だ。自分なんぞの花の咲かない事は夥しい。好い人と一所に居る事なら、三度の物を二度食べて、其の一度はお芋のお粥でも厭はないね、樂みなものさ。那の人が能く然うお言ひだつけ、女は三界に家無し、夫を以つて家と爲だつて、那の病身の弱い家にも困らせられたが、全くだね、夫を以つて家と爲に違無いのに、今ぢや其家が無いのだから、まづ私は宿無しの態だ、難有い譯さ。那の人が居たら、慙でもなからう、那でもなからうと思ふ事は始終だ。而して何を爲るにも充らないが先に立つて、衆が己の事を以前のやうな元氣が無いの、未だ老込むには早からうのと言ふけれど、自分ながら餘程腑が抜けたと思ふくらる憤然して居るよ。其通りだから雨に就け、風に就け、那の人の事は懷ひ出すのだけれど、今日と

云ふ今日ばかりは怵へ切れないほど……噫、一目で可いから此で顔が見たい。「お、歸つて来たか。」てな事を言つて、蛸斗の看板見たやうなパイプを啣へて、私の嫌な臭の真を燻しながら、那の離座敷から見上げるやうな身材で從容出てお在なさるのだ。「大變長くなりまして済みませんでした、然ぞ御不自由で御座いましたらう。」か何か云ふと、「然う自惚れんものだ、お前が居らん方が却つて靜で可い。」なんて、他の顔さへ見れば憎まれ口だ。それだから喧嘩も爲たし、焼餅も焼いたし、譴られも爲た、泣きも爲た、撲れも爲れば咬付いた事も有つたつが、何と言つたつても面白かつたのは那の時分だ。而も二人で氣儘暮しを爲て樂んだのは此家ぢやないか。家は其時のまゝで恚して残つて居るに就けても、變るは人の身の上で、那の人は立派な出世、此方は本尊様の無い堂守をして、這廬空店見たやうな處に燻つて居るとは、餘程意氣地無いのだね。

噫、もう女はお過だ。女くらゐ割の悪い、充らない者はありはしない、今度の世には立派な男に生れる事だ。那まで散々苦勞をして、棄てられたと云ふ次第ぢやないが、切れないやならない義理になつて、切れたからには那の人の事を斷然忘れて了ふのなら、未だ始末も可いのだけれど、其が忘れられないばかりに、誰も頼みも爲ないのに、今の若さに後家を立てて、高慢な顔をして居るだけ猶慘憺だ。此間も達さんが或人に私の事を話して、「俺は濟まん。」と言つて涙を零して下すつたと聞いた時の其の嬉しさ、何有、濟むも濟まないも有りはしない、添はれないのも

猶且縁だ。然う斷念めちや居るものの、心細い時、寂しい時には、心底惚れた男の事だもの戀しくなくて何爲るものか！

端無くも思迫つた満壽美は其の涼げな目に溢る、涙を推拭つたハンカチーフを其處へ敲き付けた。時に婆さんの蹺音が爲るので、遽に園内を見渡したが、満目の縁を破つて咲遅れた卯花の白妙が、消えなむとする雪の覺束なげに三處ばかりに残るのを、其色と謂ひ其姿と謂ひ、奈何見ても儚い花の咲様、と熟く感じて居る間に、自と其の儚さが染つたやうな氣がして、急に物悲しく胸が塞つて、其花は已、已は即ち其花であるが如く思倣されて、夢とも現ともなく自失してつたのである。

二

婆さんが來て何やら聲を掛けた時、満壽美は我に復ると等しく、更に又目に着く物が有つた。離座敷の縁の際に七絲緞の鼻緒と紺天友染のと、いづれも眞新しい男女の駒下駄が並んで居るのである。

「媼さん、那は奈何したの。」

「お師匠さん何で御座います。」

「大相色氣の有る履物があるぢやないか、那處にさ。」

「へい、那。……」

「お客でも有るのかい。」

「へい那は、あの、何で御座います、實は早速お師匠さんに然う申上げなけりやならないんで御座いました、お歸り早々で御座いましたもんですから、つい未だお話も致しませんが、甚だ相濟みませんで御座います、ねえ、貴方、實は簡様な譯なんで御座いますよ。」

お師匠さんのお留守中に私が一存で取計ひましたやうで、誠に申譯は御座いませんですが、私單身でもつて寂しくは御座いますし、ねえ、貴方、恁してお座敷も空いて居りますもんで御座いますから、ねえ、貴方。」

婆さんは頗る言淀むのであつた。満壽美は聞かぬ先から少しく癩癩に障つた鹽梅で、横目に熟と彼の顔……と云ふよりは、寧ろ其の唇の異しげに離るのを打目成つて居た。此に於て婆さんの唇は愈よ離るを沮むのである。

「誰かに貸したんですか。」

「へい、あの何で御座いますよ、手前の姪の主人筋で御座いまして、是非と申しまして、もう姪が手を合すやうにして頼むんで御座います、別にお座敷を汚しますやうなお方や御座いませず、

歴とした御身分のお方ぢやあり致しますんで、然云ふ譯ならばお師匠さんはお留守の事だから、ほんの内證で私がお貸し申すんだから、どうか其の積でと先様へも好くお断を申しまして、ねえ、貴方、實は此の春から、何で御座います、あの離座敷へ、ねえ、貴方。」

「御夫婦かい。」

「いゝえ、未だ表立つて御夫婦と申すんでは御座いせんけれど、是非其の御夫婦に成りたいと有仰つて、常分隠れてお出なので御座いますがね、」

「それぢや色事だ。」

「まあ、然やうなんで御座いますよ。」

「まあ、な事が有るものか、立派に然うなんでさあね。ぢや、若いんでせうね。」

「十八に廿四だと有仰いました。」

「素人なんですネ。」

「えゝゝ、素人も素人もお嬢さまの方は外神田の榊屋と云ふ鐵物屋さんのお娘御で、對手の方はお出入のお醫者様の代脈さんださうで御座いますがね、いつか、まあ出来たのを、親御様は御存じ無かつたので、いよゝゝ餘所へ御縁談が出来ると、其の始末で、お定りの騒動が持上つたんで御座います。ところがお袋様が粹で、密とお二人を逃して、其内に何とか話を付けようから、

當分忍んで居るが可い、と萬々呑込んで被在るんで、お手元からお見繼になるんで御座いますから、遠方では便利が悪し、係合の有る家ぢや直に喫付けられるからと、手前の姪が舊御奉公を致して居りました縁で、今だにお出入を致すもんで御座いますから、是へお話が有りまして、何處か無からうかと色々御心配なすつてお在なんで、此方様のお噂を致しました所が、ねえ貴方、助けると思つて是非其を奈何ともしてくるやうに、と懇々も御頼になるもんで御座いますから、姪も俱共に御心配申して、私へ参りましたんで御座いますよ。

お師匠さんのお吩咐も御座います事ですから、私も切て斷つたんで御座いますけれど、それぢやお師匠さんがお歸りに成つたら、改めて御挨拶も爲ようし、婆やに迷惑は掛けないから、と先様が然う有仰るものを、それでもとは私も申し切れませんで、到頭離座敷を一間お貸し申したんで御座います。

どうか、まあお師匠さん、私も然云ふ次第で餘儀無く何致したんで御座いますから、何分まあ御勘辨あそばして。」

「あゝ、然うですか。若い時には有内とか云ふんでせう。鐵物屋のお嬢さんにお醫者さんのお弟子ですつて？」

「然やうなんで御座いますよ。」

満壽美は目を翳せて何やら思案して居たが、

「こりや止したが可いにね。」

「はい？」

「末が案じられると申す事さ。而して奈何して居るの、大相靜ぢやないか。」

「未だ夜中なんで御座いますよ、貴方。」

「常談ぢやないよ、何時だと思つて居るんだ。」

帯の間を搜つて襟から細い金鎖を繋げた兩蓋の金時計を出して、ぱちりと啓けた。

「ちよいと十時廻つて居るぢやないか。」

「おや／＼、まあ。」

「色事になつて心掛が要るわね。些とは所帶持の稽古でも爲るが可いちやないか。」

彼は稍不興の體であつた。

三

旋て手靴から取出したのが、古代紫の鹽瀬の真入、銀延の細いので一服吸付けて、
「十八だつて？ 別品かい。」